

# 『世間胸算用』の主題

—— 卷二、卷三を中心に ——

内海友華

『世間胸算用』は、元禄五年（一六九二）正月刊、大本五卷五冊

で、各巻四章、全二十章から成る、井原西鶴作の浮世草子である。本書は序文に「一日千金の大晦日」、外題副題に「大晦日は一日千金」とあり、数多くの章が、一年最後の決算日である大晦日と関わりを持って設定されている。そして、上層から下層までの様々な町人の大晦日の過ごし方、掛乞いとのやりとり、やりくり算段が描かれる。

暉峻康隆氏は、『世間胸算用』<sup>（注1）</sup>の中で、次のように述べている。

「世間胸算用」においては、すでに新しい精神が新しい題材と新しい方法を確保し、みごとに成熟してゐるのである。

新しい精神とは、（中略）全てを受入れ、愛し抜かうとする精神であり、新しい題材とは、（中略）下層町人大衆の絶望的な生活である。（中略）「胸算用」の主題は、まさしく金銭を支配せんと志しながら、金銭に翻弄される町人の悲喜劇の描写にあらう。

（中略）対象は主として窮迫せる中流以下の町人生活であり、舞臺は主として上方商業都市である。すなわち西鶴は、一定の

時、一定の舞臺において、一定の層の生活を描くといふ、きはめて近代的な集約的方法をもつて二十の短編を掌握してゐるのである。

暉峻氏は『世間胸算用』を、中下層町人の絶望的な生活を題材とし、中下層町人への同情に基づいて、その悲喜劇を描こうとした作品であるとす。長らく定説とされてきたこの暉峻説に対して、広嶋進氏は、『世間胸算用』の章相互の関連と構成<sup>（注2）</sup>の中で、次のように述べている。

卷一、二では、二章一対の様々な「関連」「対立」が設定され、そのことによつて、大坂と京都の全体像がパノラマ状に一つながりのものとして提示されていた。これに対し、卷三、四、五では、各章ごとにその土地の話が完結し、その章内で、その地の富者（あるいは繁栄）と貧者、または成功者と失敗者が「対比」的に語られていた。（中略）

『胸算用』は、中下層町人を描こうと執筆されたものではなく、上層町人と中下層町人とを常に対比しながら、大節季を無事「仕舞ふ」者たちと「迷惑」する者たちとを対照的に描き出そうとした作品であると言える。（後略）

また、広嶋氏は、「『世間胸算用』と上層町人」<sup>注3</sup>では、次のように説く。

一、従来中層町人の話と理解してきた章のなかに、上層町人の話の章があること

二、巻一、巻二において、連続的で対照的な大坂の話や京都の話があること

三、中層町人の失敗に対する冷笑が書かれていること

四、上層町人（上流の程度）が読者として想定されていること

（中略）これらの事柄は、『胸算用』という作品が、「中下層町人大衆」への「同情」に基づいて「大晦日の中下層町人の悲喜劇」を描こうとした作品であるとする、従来の読解と対立する。

広嶋氏は、暉峻氏の論を否定しつつ、『世間胸算用』は上層・中層・下層の全ての階層の諸相を取り上げた作品であると述べ、また、上層町人と中下層町人とを常に対比しながら、対照的に描き出そうとした作品であるとしている。

『世間胸算用』には、たしかに、上層・中層・下層全ての階層の諸相が描かれている。読者として上層町人が想定されているという説も蓋然性が高く、従来の定説を否定する広嶋氏の説はおおむね説得的である。しかし、巻一、二における第二章一对の対比構造と、巻三、四、五における各章内の対比構造を指摘することによって、『世間胸算用』を上層町人と中下層町人を対照的に描き出そうとした作品とする広嶋氏の見解には、検討の余地があると思われる。

確かに、巻一・一には中層町人の寛闊な暮らしぶり、巻一・二に

は下層町人の極貧の暮らしぶりが描かれ、上層町人と下層町人の姿が対照的である。さらに、巻一・三には上層町人の老婆の合理的な儉約、巻一・四には上層町人の老婆の極端な吝嗇が描かれ、合理的な儉約と極端な吝嗇が対比されている。巻一における第二章一对の対比構造は明確なのである。

しかしながら、巻二以降の各章においては、巻一のように明確な対比構造が見られない。巻一と巻二以降をひとしなみに扱うことには問題があるように思われる。そこで、本稿では、広嶋氏とは異なる角度から『世間胸算用』を読み進め、巻二・巻三各章の主題に注目することを手掛かりに、全体の主題を探っていくこととする。

## 二

巻二全体の構造と主題を明らかにするため、まずは、巻二各章の構造と主題について考察していきたい。巻一、巻二は、「第一章と第二章、第三章と第四章とが、それぞれ一对となって対比・対照され、関連付けられて付置されている」<sup>注4</sup>という広嶋氏の論をもとに、巻二を二章ずつ読み進めることとする。

広嶋氏は、巻二・一では「銀貸しが借り手の内証を暴露する」ことを、巻二・二では「借り手が自らの内証を暴露される」ことを各話の要点としている。また、氏は、巻二・二での主人公と茶屋女の嘘のつき合いと、巻二・一での騙し合いとの類似を指摘し、この二章は、「埒の明ざる」「内証」の「うそ」・「見せかけ」が、話の展開に従って暴露され、露呈する話であるとしている<sup>注5</sup>。

以上の所論を念頭に置きながら、巻二・一「銀一匁の講中」につ

いて考察していこう。この章には二つの騙し合いが描かれている。話の順序とは異なるが、騙し合いの場面を切り取って見ていく。

まず、金貸しの親仁とせちがしこき人との騙し合いである。これを騙し合いAとする。次の引用は、せちがしこき人が、金貸しの親仁を騙す場面である。内証の悪い商人に金を貸したことを嘆く金貸しの親仁に、一匁講仲間であるせちがしこき人が、金を取り返す方法を伝授する代わりに、その謝礼を求めている。

(1) 「随分内證を聞合せ、此中間はたがひに様子をしらせ、向後は借入をいたすべし。いづれもかく云合すからは、出しぬぎにあはし給ふな（注）。

(2) 時に最前のせちがしこき人のいふは、「千日千夜御思案なされても、此銀子無事に取かへす工夫は、只ひとりより外になし。此傳授、上々の紬一疋ならば、慥かに取かへして進上申」(1)は一匁講仲間の言葉である。この言葉から、一匁講の仲間は、互いに助け合うために集まっていることがわかる。それに対して、(2)のせちがしこき人は、助かる方法を伝授する謝礼を求めている。互いに助け合うために集まっているにも拘わらず、謝礼を求めるのは矛盾した行為であろう。

せちがしこき人は、足腰が立たない程嘆き、男泣きする金貸しの親仁の何とか金を取り返したいという思いに付け込んで、謝礼を請求したのである。しかも、貸した金を取り返す方法というのが、内証の悪い貸付先の商人とさらに仲良くなって、金貸しの親仁の実際の娘をその家に嫁がせるというもので、とても良い方法とは考えられない。これらのことから、せちがしこき人は、金を取り返すためのあざといやり方を唯一の方法と騙して伝授し、金貸しの親仁から謝

礼を取ろうとしたと言える。

次に、金貸しの親仁が、せちがしこき人を騙す場面を見てみたい。伝授された方法通りに金を取り返した金貸しの親仁が、上等の紬一疋と中綿を払う約束を守らず、上等の紙子二反を渡して済ませようとしている。

(3) 「扱其時は紬一疋とは申せしが、是にて御勘忍あれ」と、白石の紙子二たんさし出して、「中わたは春の事」といひ捨て歸りける。

金が返ってくる前、困り果てた金貸しの親仁は、「中わたまで添まして御礼申さう、何とぞ頼む」と、せちがしこき人が示した謝礼の条件に自分から「中綿」を付け足してまで返金を懇望していた。しかし、金を取り返した後では、(3)のように、態度も大きくなり、約束も破っている。つまり、金を取り返した金貸しの親仁は、約束通りの謝礼を払うのが惜しくなり、約束より価値の低いもので済ませようとしたと考えられる。結果として、金貸しの親仁は、せちがしこき人を騙し、その知恵をうまく利用したのである。

(1)の傍線部「出しぬぎにあはし給ふな」という一匁講仲間の言葉は、この二人の騙し合いを暗示するものであり、仲間同士の騙し合いの滑稽さを強調していると言えよう。

本話におけるもう一つの騙し合いは、金貸しの親仁と貸付先の商人との騙し合いである。これを騙し合いBとする。貸付先の商人が金貸しの親仁を騙す場面では、金貸しの親仁は、貸付先の商人の娘の嫁入り行列を見て、持参金の多さから内証が良いと判断し、金を貸したと述べている。だがそれは、実際には、内証を良く見せかけるための、貸付先の商人の芝居だったのである。この騙し合いの前

には、近ごろは内証の悪い商人が、計画的に借金をし、わざと分散

すると書かれている。つまり、この貸付先の商人もわざと分散し、

金貸しの親仁から借りた金は返さない予定であつたと考えられる。

結局、貸付先の商人は、内証を良く見せて金貸しの親仁を騙し、借りた金を自分のものにしたのである。

また、金貸しの親仁が、貸付先の商人を騙す件において、せちがしきき人が金貸しの親仁に金を取り返す方法を伝授するとすぐに、金貸しの親仁が金を取り返した場面に切り替わっていることから、伝授された方法通り金を取り返したと読むことができる。

その取り返す方法とは、金貸しの親仁の娘を貸付先の商人の家に嫁がせる持参金として銀千枚やると相手に聞かせ、そのうえで貸していた金の返済を求めると、持参金に目がくらんだ相手から金が返ってくるというものであつた。金貸しの親仁が、持参金の銀千枚をやらなかつたとは書かれていない。だが、騙し合いAにおいて、仲間との約束を守らなかつた親仁が、商売相手であるこの商人との約束を守るには、到底考えられない。したがって、金貸しの親仁は、銀千枚の持参金をやると貸付先の商人を騙し、金を取り返したと読むことができる。

以上、巻二・一には、二つの騙し合いの構造が読み取れることを確認してきた。広嶋氏は、巻二・一と巻二・二における、嘘の付き合いと騙し合いの類似を指摘するにとどまっている。しかし、巻二・一は、全ての登場人物に欲に関わる描写が見られ、その滑稽さを強調しつつ、二話の中に二つもの騙し合いが描かれていた。巻二・二「銀一匁の講中」は、自分の財産を増やすための胸算用として、悪い知恵を使った騙し合いを主題として描いた話と思われる。

### 三

続いて、巻二・二「訛言も只はきかぬ宿」を見ていく。章題にも「訛言」とあるように、この話には多くの嘘が描かれ、主人公の内証の悪い男が色茶屋に行つてからは、ほとんど嘘の付き合いで話が展開している。次の引用は、色茶屋における男の言葉である。

(4) われらが身軀しらぬ人は、もしは借銭こはれて出違ふかとおもふもあれば、氣味がわるひ。此嶋中に一錢も指引なしの男、ことに限銀にて、子のできるまでの宿をかし給ふか。

色茶屋に行つた男は嘘をつき、妻の着道楽を告白しながら、自分を金持ちに見せかけようとする。さらに、男は、自分が今日家に居ることができないのは妻のお産のせいだと嘘をつく。(4)では、自分は借金の無い男だと嘘をつき、大晦日に家に居ないことを怪しまれないようしている。男の発言は、全て傍線部「子のできるまでの宿をかし給ふか」という言葉に繋がりが、大晦日の一日を過ごす宿を貸してもらつたための嘘であつたと考えられる。この男は、掛えいから逃れるため、大晦日の一日を色茶屋でやり過ごそうとしていたのである。

(5) 此客わるひ事には覺えつよく、「汝此まへ花屋に居し時は、丸袖にてつとめ、京で十九といふた事、大かた二十年にあまる。せんさくすれば、三十九のふりそで、うき世に何か名残あるべし。小作りにうまれ付たる徳」

(6) 此女の母親らしきもの、来て、ひそかによび出し、ひとつたつ物いひしが、「何の事はない、是が只の見おさめ、十四五匁の事に身をなげる」といふ。此女泪ぐみて、今までうへ

に着たるぐんない嶋の小袖を、ふろしきづ、みに手まはしはやくして、親にわたすありさま、いかにしても見かねて、又一かくとらせて戻し、

右の引用は、茶屋女が男につく嘘である。今年で十九だと年齢を若く偽った茶屋女は、(5)で男にその嘘を指摘され、男を騙すことに失敗している。この女は二十年前からこの嘘をついているといふのだから、人を騙すのにずいぶん馴れていることがうかがえる。(6)では、茶屋女の母と茶屋女が一緒になって嘘の芝居をしている。母が十四、五刃のことで身を投げると言つて男の同情を誘い、男から金をせしめていることがわかる。

次は、章末尾の文章で、男が掛乞いに見つけられ、有り金全部と羽織、脇差、着物一枚を取り上げられた後の場面である。

(7) 此おきやくしゆびあしく、「人にいひかけられて、合力せねばならず。とかく節季に出ありくがわるひ」と、これにも分別がほして、夜の明がたに爰を歸る。「たはけといふは、すこし脈がある人の事」と、笑ふて果しける。

(7)には、金持ちぶつた嘘が完全にはれたにも拘らず、嘘をつき続ける男の滑稽な姿が描かれている。(7)の傍線部では、茶屋女が男をたけ以下だと笑つており、騙すことに関して茶屋女の方が上手であったことがうかがえる。少しも脈の無い男だったと言つてゐることから、茶屋女は男の嘘に最初から気が付いていたが、わざと調子を合せていたようにも思われる。

卷二・二には、主人公の男が茶屋女を騙して大晦日をやり過ぎそうとするが、逆に、茶屋女に騙されて金を取られるという、騙し合の構造が読み取れる。卷二・二の主題を「借り手が自らの内証を

暴露される」とする広嶋説は、男が茶屋に隠れているのを掛乞いに見つけられ、金持ちのふりをしていた嘘がばれる部分に注目したものであろう。しかし、茶屋女には最初から男の嘘は見透かされていたのであり、「内証を暴露され」たとは言えまい。卷二・二は、嘘のつき合いが話の大部分を占め、男と茶屋女の両者が相手を騙すために複数の嘘をつく様子が滑稽に描かれている。西鶴は、卷二・二詛言も「只はきかぬ宿」の主題として、自分の生活のために騙し合いをする人々を描いたと考えられるのである。

以上、卷二・一と卷二・二には、どちらにも、自分の生活を賭けて騙し合いを演じる人々が描かれていた。それは、翻せば、そのような胸算用の者<sup>（1）</sup>に気をつけるという教訓ともなつていよう。つまり、この二章は、同じ主題のもとに書かれた話と云えるのではないだろうか。

卷二・三、卷二・四についても、急いで検討しておきたい。広嶋氏は、卷二・三「分限者たちの商売の成功と失敗」、卷二・四「中層町人の掛け取り撃退の失敗と成功」を各話の要点であるとし、上層町人と中層町人の話が対比的に配置されていると述べる<sup>（2）</sup>。

卷二・三には、嫁を貰うことは儉約につながるという仲人口の意見と、傾城の良さを述べ女郎狂いを勧める意見という、正反対の二つの意見が示された後、儉約に励んで金持ちになった弟と、遊里に通い貧乏になった兄が登場する。仲人は「爰が大事の胸算用」と啖呵を切つて持参金付きの娘を売り込み、遊里肯定派の意見は「爰は分別の外ぞかし」と述べて、女郎狂いに走る者の心理を説明している。いずれもわざとらしい程に強調されたフレーズで、二つの意見が実は誠実な意見ではなく、言葉巧みな騙し文句として例示されて

いと理解することもできるだろう。

広嶋氏はこの兄弟の成功と失敗に話の要点を見出ししているが、この章の要点は、むしろ、兄弟を騙す二つの意見にある。二つの意見が大部分を占め、強調されて描かれていることから、巻一・三「尤始末の異見」は、言葉巧みな騙し合いを主題として描いた章だと考えられる。

いっぽう、巻二・四は、「惣じて物に馴てはもの怖じをせぬものぞかし」という言葉を前提として描かれている。亭主は家に押し寄せた掛乞いたちを狂人の芝居で騙し、追い返す。だが、一人残った材木屋の小者には掛けを取られ、もっと良い撃退法をその小者から教わる。毎年撃退法を教わる関係を保つためには、小者には毎年掛けを支払わなければならない。つまり、亭主が狂人の芝居で騙そうとするが、材木屋の小者に騙し返され、毎年掛けを支払う関係になるという騙し合いの構造が読み取れるのである。物馴れた者としての亭主と材木屋の小者とのやり取りが詳しく描かれていることから、巻二・四「門柱も皆かりの世」の主題は、自分の生活のための騙し合いであると言えよう。

これまでの検証から、巻二の全ての章が騙し合いという主題で貫かれていることがわかった。「世間胸算用」巻二は、二章一対の構造ではなく、「騙し合い」という統一テーマのもとで書かれた、四章一群の構造になっていると考える。

#### 四

『世間胸算用』巻三をめぐる広嶋説は次の通りである。註60。

巻三以降では、巻一、巻二とは異なり、二章一対の連鎖の試みはなされていない。これにかわって巻三以降では、「対立」や「対照」が同一の章の内部において見られるようになる。

本節では、巻三全体の構造と主題を明らかにするために、巻三の構造と主題について考察し、さらに章の内部における「対立」「対照」について検証していきたい。

まず、巻三・一「都の顔見せ芝居」に注目する。この章は、京都で催される顔見せ芝居の見物の話である。次の引用は、江戸の者という上層町人の、贅沢な芝居見物を描いた場面である。

(8) 中にも、江戸の者、われひとり見るために銀十枚の棧敷を二軒とりて、狸々皮の敷もの、道具置の棚をつらせ、腰屏風・枕箱、其後ろに料理の間、さまざまの魚鳥、(中略) 何にても不自由なる事ひとつもなきやうに拵らへ、榮花なる見物、此心は何となく豊かなり。此人大名の子にもあらず、只金銀にてかか成事なれば、何に付ても銀もうけて、心任せの慰みすべし。かゝる人は、跡のへらぬ分別しての楽しみふかし。

(8) は、上層町人である江戸の者の、贅を尽くして芝居見物をする様子が、肯定的に描き出されていることがわかる。

(9) えい山へも響さわたる程のさはぎ。京に人も見しる程の者にしてあれば、「たれ様の御ふく所」、「どなたの掛屋」などいふさへ、悪所のさはぎは奢りらしく見えける。ましてやはした銀の商賣人、たとへ氣延しに芝居見るとも、となりに苧若のまぬ所を見すまし、圓座かりて見て、役者・わか衆の名覺ぬ物か。

(9) は、先程の引用の後にある地の文で、財産がそれほどない人の芝居の楽しみ方を一般論として述べた文章である。京都の金持

ちでさえ、芝居での騒ぎは贅沢なように見えるのだから、まして端金の小商人などは、円座を借りて芝居を見るので十分であるとしている。(9)と(8)を総合すれば、身分相応な芝居の楽しみ方をするのが良いという、西鶴の考えがかがわれて来よう。

次の引用は、荒木予次兵衛の顔見せ芝居を見物する金持ちぶった格好の若者たちの様子を見て、その内証を知る人が噂をしている場面である。

(10) 内証しらぬ事、皆川西のやつらなり。中京の衆と同じ事に、大きな貞がおかしい。知らぬ人は歴々かと思ふべし。(中略) 米薪は其日々に當座買の身上して、酒の相手に色子ども。かはいや神ならぬ身のあさましさは、銀成客とおもふべし。いかなく、此四五年買が、り濟したる事なし。あの中に染嶋の羽織着たる男、ちいさき錢見せ出して居けるが、兄に三井寺の出家を持けるが、是から合力請てそこくにも行先の年を越べきか。其外にひとりも、京の正月するものは有まじ

(10) には、米薪を当座買いするほど貧しい身の上にも拘わらず、色子どもに酒の相手をさせる若者たちの様子が描かれる。身分相応な芝居の楽しみ方をしているこの若者たちは、顔見せ芝居の後も毎日色茶屋で遊んでいたが、その代金を請求されると、行方不明、座敷籠、自殺未遂という様々な方法で代金を踏み倒してしまった。この若者たちは、無事に年を越せる見込みもないのに、贅沢な芝居見物をして色茶屋で遊び、最初から色茶屋の代金を踏み倒すつもりであったと考えられるだろう。

(11) 茶屋は取つく嶋もなく、夢見のわるひ寶舟、尻に帆かけてにげ歸り、兼ての算用には十五兩の心あて、預置れしあみ笠

三がいのこりて、大晦日のかづき物とぞ成ける。

(11) は、章末の文章で、若者たちに代金を請求したものの、踏み倒されてしまった色茶屋が、結局大損をこうむってしまったという場面である。色茶屋の立場から描かれ、胸算用の悪い者たちのせいで大損をしたという終わり方になっている。胸算用の悪い者には用心するのが良いという、西鶴の見解を読み取ることができよう。

広嶋氏は、「京都の『歴々』と『川西のやつら』の対比自体が章の眼目となっている」と指摘するが、西鶴が意図的に対比させようとしたなら、一方が金持ちになり、もう一方が貧乏になるとい、明確な対比構造にするはずであろう。しかし、この章では、京都の「歴々」という上層町人は、台詞中に出てくるだけで、登場人物ではなく、氏の述べる対比構造は成立してはいないと思われる。

卷三・一「都の顔見せ芝居」の主題は、身分不相応な贅沢をし、計画的に代金を踏み倒すという悪い胸算用にあると思われる。

## 五

次に、卷三・二、卷三・三、卷三・四の構造と主題について考えていきたい。

広嶋氏は、各話の要点を、卷三・二「大晦日における掛け取り上手の商人と、大晦日にわずかな金を無心して失敗する『ふるなの忠六』との対比」、卷三・三「『大事の君子さま』がいる奉公先の家と、乳児が『乳はなれ』をせざるを得ない極貧の夫婦との対照」、卷三・四「繁栄する堺と、『広い堺中で』(略)四五人」の大晦日の貧家との対照」「『貧福のさかい』自体が本章の主眼」であると述べてい

る<sup>注10</sup>。

卷三・二「年の内の餅ばなは詠め」には、掛け取り経験の豊富な手代の話と、ふるなの忠六の話が含まれるが、まず注目したいのは、その二つの話の間にある「掛乞にも色々の心ざし、よきものすくなし。人は盗人火は焼木の始末と、朝夕氣を付るが胸算用のかんもんなり」という言葉である。話前半に登場する経験豊富な手代は、最近は昔よりも掛け取りにくくなったと嘆いているが、傍線部に注意してこれを読めば、その発言の信憑性も疑わしく感じられてくる。手代は、回収できた掛けも時勢にかこつけて取れなかったことにし、実は私腹を肥やしているのではなかったか。

後半は、ふるなの忠六という芸達者な男が、ある人に銀五百目を無心し手に入れたが、芸を披露する間に、その重手代にその金を取り上げられるという話である。この重手代は、主人の客人であるふるなの忠六の金を堂々と取り上げており、金に抜け目なく、金の扱いに慣れていると言える。本章は、悪い胸算用をたくらむ重手代に金を盗られ、損をしたふるなの忠六の視点で締め括られている。卷三・二「年の内の餅ばなは詠め」の主題は、主人のためにならない手代の悪い胸算用ということになる。

卷三・三「小判は寐姿の夢」の冒頭には、思うことは必ず夢に見るものだが、金を拾う夢は卑しく、自分で働かなければ金はあるものではないとある。ある貧者の男が、昔見た小判の山を今も忘れることができず、小判を欲しいと思いつつ寝た。大晦日の明け方、その女房は小判の山を見るが、それはすぐにかき消えてしまう。働かずして金持ちになろうとする男の胸算用の悪さは明白で、この後、飢え死にを危惧した女房は乳母として奉公に出ることを決意、乳飲

み子を残して出ていってしまう。金を欲しがっていた男であったが、女房と引き替えに金が入っても、全く嬉しそうではない。男は、胸算用の悪さゆえ相当な遺産を使い果たして江戸にはいられなくなり、女房のおかげで伏見に住んでいたのである。

近所の女房達の告げ口によって、奉公先の旦那の女好きな性癖を知った男は、金を返して女房を取り返す。もはや金の欲に取り憑かれた男の姿はなく、金よりも女房が大事であることに、男はようやく気がついたのである。卷三・三「小判は寐姿の夢」の主題は、悪い胸算用を続けると、金だけでなく、金よりも大事なものを失ってしまうということである。

卷三・四「神さへお目違ひ」は、年徳の神の話である。諸国の神々が出雲大社に集まって、国ごとにふさわしい年徳神の派遣を決めている。

年徳の神が、店構えの良い堺のある家に正月をしに入ると、そこは実は、策を弄して掛乞いを追い払う貧家であった。掛乞いを追い返した家の内儀は、他家が雑煮を祝っている時に正月の準備をし、二日になって元日を祝うのをめでたい行事として、十年も続けているという。年徳神に対しては、折敷が古くても堪忍して下さいと言いい、その悪い胸算用をいっこうに改めようとはしない。年徳神はその家相應の神が派遣されるのだから、神様にあまりに不自由な思いをさせると、翌年には徳のより少ない神が来ると推測される。

卷三・四「神さへお目違ひ」の主題は、計画的に借金から逃れるような悪い胸算用を続けていると、それ相應の年徳神しか来なくなり、不幸になってしまふということである。

卷三・一、卷三・二は、どちらも悪い胸算用に迷惑をかけられる



話であり、巻三・三、巻三・四は、悪い胸算用をして迷惑をかけるという話であった。客体と主体という違いはあるが、巻三は全て悪い胸算用を描いていると言える。したがって、巻三の四章は統一されたテーマで描かれており、巻二と同様に四章一群の構造になっていると言えるのである。

## 六

巻二、巻三各章の主題が明らかになったところで、各章が描く階層に注目してみたい<sup>注10</sup>。

巻二・一は、金貸しの親仁を主人公とした話であった。一匁講に集まる金貸しの親仁は中層町人の主人であり、本章は主として中層町人を描いた話と言える。

巻二・二の主人公、大晦日に茶屋に行く男は、中層町人と目される。巻二・三に登場する兄弟は、もとは「烏丸通り歴く」の金持ちであり、この章は上層町人の話と言える。

巻二・四における狂人の芝居で掛乞いたちを追い返す亭主は、長年借金を続ける中層町人である。

巻三・一には、上層町人の「江戸の者」と、下層町人の「川西のやつら」という若者たちが登場するが、身分不相応な芝居の楽しみ方をする「川西のやつら」の話が特に詳しく描かれることから、この章は、主として下層町人を描いた話であると言える。上層町人の身分相応に贅沢な芝居見物をする姿を描くことで、贅沢に芝居を楽しむ下層町人たちの、身分不相応さを際立たせている。

巻三・二は、手代の胸算用の悪さを描く。この手代を雇っている

家は、蔵屋敷に出入りするほどの商人で、屋敷にも高価な物ばかり置いてあることから、この章は上層町人の話である。

巻三・三における主人公の男は、釜の下へ焚く薪もない程貧しい下層町人である。

巻三・四は、年徳神の訪れた家の胸算用の悪さを描くが、その家は、掛乞いを芝居で追い返すような中層町人の家である。

以上、巻二、巻三における上層町人の話は、巻二・三、巻三・二の二章、中層町人の話は、巻二・一、巻二・二、巻二・四、巻三・四の四章、下層町人の話は、巻三・一、巻三・三の二章である。

## 七

『世間胸算用』巻二、巻三各章の構造と主題について考察した結果、『世間胸算用』巻二は四章全てが騙し合いという統一主題で書かれており、四章一群の構造になっていた。また、『世間胸算用』巻三では、巻三の四章全てが、悪い胸算用という統一主題で書かれており、これも四章一群の構造になっていると指摘した。

広嶋氏は、『胸算用』は、中下層町人を描こうと執筆されたものではなく、上層町人と中下層町人とを常に対比しながら、大節季を無事「仕舞ふ」者たちと「迷惑」する者たちとを対照的に描き出すとした作品であると言える」と述べている。西鶴は、果たして、上層町人を描くための対比として中下層町人を登場させたのであろうか。

巻二、巻三に上層町人の話は二章、中層町人の話は四章、下層町人の話は二章ある。だが、その全てが上層町人と中下層町人との対

比を目的として描かれたものではなく、悪い胸算用を強調するなど、その章の主題をわかりやすく表現するため、異なる階層の町人を登場させたものであった。また、明らかに、中下層町人を主人公として設定し、中下層町人自体を描いた章がいくつも見受けられた。もちろん、上層町人自体を描いた章もあった。このことから、西鶴は、特定の階層の町人を描こうとしてこの作品を執筆したのではないと考えられる。では、なぜ西鶴はこのような様々な階層の町人を描いたのであろう。

先に述べたように、巻二と巻三の主題は、騙し合いと悪い胸算用であった。これらの主題を通して、西鶴が読者に伝えたかったのは、結局のところ、騙し合いや悪い胸算用には用心せよということではなかったか。

その読者とは、中層町人の主人であり、経営者、雇用主である。西鶴は、中層町人の主人への教訓をこめて『世間胸算用』を描いたと考えられる。そのように考えれば、巻二、巻三の計八章の中で、中層町人を描いた話が四章と最も多い事にも納得がいこう。西鶴は、中層町人の主人の目指すべき姿として上層町人を描き、また、中層町人の主人が胸算用に油断して、失敗した姿として下層町人を描いたのである。

『世間胸算用』の主題は、中層町人が守るべき胸算用の教訓であったと考える。巻四、巻五の構造と主題については、今後の研究の課題としたい。

(注1) 暉峻康隆『「世間胸算用」』（『西鶴 評論と研究 下』、中央公論社、昭和二十五年）

(注2) 広嶋進『「世間胸算用」の章相互の関連と構成』（『西鶴探求 町人物の世界』、ペリかん社、平成十四年。初出『近世文芸 研究と評論』第三十一号、昭和六十一年十一月）

(注3) 広嶋進『「世間胸算用」と上層町人』（『西鶴探求 町人物の世界』、ペリかん社、平成十四年。初出『清心語文』第二号、平成十二年八月）

(注4) (注2) に同じ。

(注5) (注2) に同じ。

(注6) 以下、『世間胸算用』の引用は、『対訳西鶴全集 第十三巻 世間胸算用』（明治書院、昭和五十年）に拠る。

(注7) (注2) に同じ。

(注8) (注2) に同じ。

(注9) (注2) に同じ。

(注10) (注3) 論文における各階層の定義を参考にした。

〔付記〕

本稿は、平成二十三年度山口大学人文学部国語国文学会での口頭発表に加筆修正したものである。席上、及び、発表後に諸先生方から貴重なご指導、ご意見を賜った。この場を借りて深く感謝申し上げます。

(うつつみ・ゆか)